

—〈書 評〉—

安本実・竹内久美子訳

『ある冬の童話——遇羅錦作品集 I』
(田畑書店)

(詩人) 梅田 智江

『ある冬の物語』は1946年生まれ作家・遇羅錦の処女作で、彼女の文革時の体験をそのまま書いたという「実話文学」である。内容は「夫と子がありながら、最愛の兄の面影を持つ青年に恋をし、夫と子を捨てたが、結果はその青年にも去られてしまったというラブストーリー」を縦糸にして、その青年に「右派とみなされた兄や彼女を含む家族のなめた政治的迫害、辛酸の遍歴を語って聞かせる回想部分」を横糸に構成された物語である。しかしながら本編をよく読むためには、併録された「乾坤は特に重く、我が頭は軽し——兄・遇羅克の思い出」を読む必要があるだろう。遇羅克は文革時、知識人を血祭りにあげた「血統論」に抗して、人は努力によって出身家庭の束縛を受けることなく自分の道を選択できると主張した『出身論』を1966年10月に著作し、当時大きな反響を呼んだが67年「反動的毒草」と断ぜられ68年逮捕、70年に処刑された「烈士」だが、この兄の存在とその死こそが彼女の作品を誕生させたといえるからだ。回想の中で彼女は獄中に残された兄の万年筆を抱きしめて「この万年筆を決して無駄にはしない。きっと兄さんへの愛と思い出を書くわ。わたしは生命をかけてわたしなりの実話文学を書きあげるわ」と誓っているが、彼女は兄を殺された妹としてなんとしても兄の潔白を表し、同時に冬の時代を生きている自分の遍歴そのままをさらけだして書くことで「何が問題か」を社会に叩きつけたいことには死んでも死にきれなかったのだ。書くことはまた兄への許しを乞うことでもあった。彼女には「兄を売り渡したのは自分だ！」という罪の意識がある。1966年8月、羅克が紅衛

兵の家財押収を恐れて一切の原稿日記手紙類を焼き捨てるのだが、ここ1年間に書いた日記だけは焼くのに忍びなく羅錦に預ける。しかし彼女の手落ちでそれが公安の手に渡ってしまったのだ……その時から彼女は死ぬまで兄に許しを乞い続けるだろうことを確信する。「愛と自由」を何よりも大切にし真の学問と社会正義をめざして果敢に闘う兄の姿を見て育った羅錦、その兄がその闘いのために殺されたことで兄の存在は彼女の中で「神」そのもの、あるいは彼女の良心そのものとなってしまった。彼女は慚愧し許しを乞う。たとえば紅衛兵に殴られ「跪け！」と強要され心ならずも頭を下げてしまったその時。あるいは身売り同然で結婚しようと決意した時、突然雷が鳴り、その雷鳴に「結婚を生活のための手段とすべきではない」という激しい兄の叱責の声を聞いて泣く。彼女のこの「想い」に沿って本編を読み進めていけば、彼女の行動の全てに納得がいく。兄に似た青年に一目で恋をし、夫や子供に後めたさを感じないでいる不思議さも。なぜなら彼女は恋人を得たのではなく共に兄の思い出を語り合える「知己」を得たのだから。あるいは夫に対して結婚生活3年間のうち初夜の1分間だけの性交しか許さなかったという異常さも。彼女は書く。「比天荒に来て、わたしは身売りして戸籍を移す娘が自分だけではなくありふれた例であることを知った。しかし彼女たちの不幸はわたしと同じだったが、彼女たちの幸いはわたしにはなかった。彼女たちには夫をはかる尺度としての兄のような存在はなかったし、彼女たちは字を知らないので、どんな理想も事業心もないので従ってまた最も満足しやすい現状にでもあったのだ」。彼女の結婚生活は不幸であった。初夜に何の愛情も心の準備もないまま、無理やり夫に犯された1分間を彼女はこう書く。「呪わしき1分間、わたしに与えた苦渋と恥辱は百年にも勝るのだ」あるいは「1分間！ どうしてこの男の息の根を止めたものか。わたしは絶対にお

前の存在を許すことはできない」。そして裁ち鋏を夫に突きつけこう叫ぶのだ。「いいかい、もし今後厚かましくも、わたしに指一本でも触れるものなら生かしちゃおかないよ。この命に代えてでもお前を生かしてはおかない。いいねッ!」。この夫は粗野で愛情表現を知らないだけの人物のように見受けられ同情したくもなるが、羅錦の心情に沿って読めば彼女の異常な生理的拒否反応もわかる気がする。それは女だからこそわかる直感といえるかもしれない。一般的に性行為の時にこそ人間の本質がでるものだ。男が女の気持ちを知らうともせず自分の性欲だけで女をモノ化し、女はそれに抵抗もしないで自分をごまかし受け入れる——その男の鈍感さ横暴さ、そして女の狡さに羅錦は人間の最も愚鈍なる部分を見てしまったにちがいない。「愛と自由」を何よりも神聖なものとして闘いとうろとしていた兄を尊敬していただけに、それが一瞬にして踏みにじられてしまったのだ。犯されたのは彼女の肉体ばかりでなく兄の思想でもあったのだ。生活のためには「長いものに巻かれろ」「事なかれ」「自分可愛さ」といったエゴイズムからくる生活保守主義——飛躍した言い方だが彼女自身も持っていたこの生活保守主義こそが、最愛の兄を銃殺刑にしたのだという直感があったにちがいない。たとえば紅衛兵に殴られ跪かせられた屈辱より、夫に犯されたこの屈辱の方が彼女にとって味方を装っている分だけ許せないものなのだろう。彼女は夫を憎悪したが、それは夫の中に自分の弱さ「他人に跪いて生きようとした己れの曖昧さ愚かさ、狡さ」を見てしまったからにちがいない。自分の弱さへの怖れも含めて、だからこそ許してはいけなかったのである。3年間指一本触れさせないで守ったものは彼女の思想であり、兄の思想なのだ。憎むべきは夫ではなく、このような結婚を強いる社会そのものであり、彼女の怒りはまさに政治的なものなのだと思う。彼女は「兄・遇羅克の思い出」の最後にこう書きつ

けている。「羅克を死の刑場に向かわしたことに
ついて自分にも一分の責任はありはしないか。4
人組の力だけで羅克を殺すことができたかどうか」
と。枚数が尽きたので手短かにしか書けないが、
このことは我々においても考えられなくてはなら
ない問題だろう。現代の日本人が文革時の中国民
衆の持っていた弱さを持っていないと言いきれ
るだろうか。たとえば今、学校でおきている「いじ
め」は象徴的である。価値感が均一化し、個性的
なもの、異質なものは徹底して排除される。親も
教師も子どもも異質にだけはなりたくないと多数
に身をすり寄せる。その凄まじさは中学生の親で
ある私が日々身に沁みて恐怖する事実である。こ
とは学校内だけではない。じわじわと一般社会に
浸透してきていることは周知の通りで、多数が少
数を排除するそのファッションに気づかないでい
られる鈍感さこそ、己れの敵としなくてはならな
いことだろう。中国の文革は異常な権力闘争であ
った。しかし、それを許してきたのは民衆のひとり
ひとりなのだ。日本人であるわたし達もまた、ひ
とりひとりの「自分だけは痛い目にあいたくない」
という生活保守主義が結局は自分たちの首をしめ
ていくのだという事実を直視しなくてはならな
いだろう。羅錦の闘いがそうであったように、生活
保守主義との闘いこそが真の反逆であり、最も異
端的で過激な闘いなのだという事をあらためて
思う。「訳者あとがき」によれば羅錦はこの本編
「冬の童話」が苦難の中の人間の美しい部分のみ
を描いていることに気づき、今度はその醜い部分
をも取り入れて「冬」発表前後の現実生活を「春
の童話」に反映させ、「春の童話」発表前後を「求
索」の中に描き、さらに西ドイツへの政治亡命と
いう行動に出ながら、自分の半生をトータルに描
くといわれる「中国で三度結婚した女の経歴」を
完成、刊行しようとしているとある。私と同世代
のこの女の作家の生き方をこれからも注目したい
ものだ。(1986年12月刊,四六判,463頁,2200円)